

林凶小煩遊

時報
順寺
2019.5

永代経法要

五月十九日(日)

午後一時より

読経(衆僧供養)

法話

おとぎ

風薫る五月、貴家皆様にはご健勝にてお過ごしのことと存じます。

さて、例年のとおり「永代読経法要」を厳修いたします。

「永代経」とは、「私」が子供や孫そして

子孫の幸福を願うと同じように「私」に幸せで在って欲しいと願って下さっている仏となられたご先祖に感謝の思いを込めて僧俗共に勤める大切な行事です

常日頃、生活の多忙さにかまけて、つい忘れていらっしゃるご先祖のお蔭に気づき、仏恩報謝のひと時を共にすごしましょう。

当山順正寺では永代読経志を左記に定め、順正寺永代読経過去帳に記載し永代供養致しております。ご希望の方は住職までお申し出下さい。

* 特別永代読経 (毎月ご命日読経、祥月命

日特別読経)

志納金参拾萬円以上

* 永代読経 (毎月ご命日読経)

志納金壹拾五萬円

元号が変わった「令和」というらしい。「令」は命令、勅令の「令」あまり好きな言葉ではない。辞書には「よい」と言う意味も書いてあるがその意味で使うことはほぼない。漢和辞典には字の成り立ちとして「人が跪いて神意を聞くさま、言いつけるの意」とある。万葉集から選定したというが本文ではなく漢文で書かれた序文からの引用だ。之を以って日本の古典だの独自のなんて言っている人たちのなんと多いことか「ポーツと生きてんじゃねーよ」

今、日本人は自信を持ってなくなっている。自信のない者ほど吠えて空威張りをする。これは日本だけでなく世界的な傾向だが。そこからポピュリズムが展開し、ヘイトスピーチ、ハラズメントが生まれてくる。おかしくないか、白人の観光客が騒いだりマナー違反しても大して問題にならないがアジアの観光客が同じことをやったら迷惑だと声高に騒ぐ。おかしくないか、四十年前の大卒初任給より今の大卒初任給が低いつて。ソニーの何たら会長の10年間の所得50億円で自ら思考することを嫌い上からの命令を受けなければ行動できないのが今の私たちだ。そういう意味では「令和」はぴったりののか。今頃、支持率がちよつと上がった総理大臣をはじめ村度軍団は「国民なんてちよれいわ」とほくそ笑んでいることだろう。

住職

つながっている

みなつながっている。過去現在未来を通して。

好き嫌い関係なく、居住地も関係なく、

仕事や学校、社会的なものも関係なく、

虫・動物・植物、生存の形も関係なく、

つながっている。

地球の裏側でいのちが誕生したことも、失われたこと

も、どこかの誰かがクシャミをした、鼻をほじった、

寝た、怒った、泣いた、笑った。すべて一大事。

すべてがつながっている。

信じようが信じまいが、

わかるうがわかるまいが事実。

そのつながりが作り出しているのは「わたし」。

理屈・理念・知識では説明がつけられない不可思議。

想像してもとてもではないが追いつかない不可思議。

つながりを痛めつけることは、傷つけることは、

自分の「いま」を否定する愚行。

他の否定Ⅱ「わたし」の否定。

副住職

腹が減った。いや、ひもじいのだ。それも始終。この国では大きな飢饉の最中だ。たとえ一日一食でも、米粒のほとんど見えない汁ばかりの粥でも食べられるだけでした。母とは物心つく前に死別した。父は下級貴族であったが平家没落のあおりを喰らい失脚し隠遁し行方も知れない。今は伯父に養われている。父の兄弟二人は朝廷にそれなりの立場を持っているが下級であることに変わりはなくこの飢饉では食いは回ってこない。

ただじつととしても頭には食い物の事しか浮かばない。禁じられているが屋敷の崩れたついで塀を乗り越え街へ出ていく。昨日も今日も街は変わらない。荒廃の極みだ。これ以上廃れようがない。道端に人が倒れている。まだ息のある者もいるがすでにこと切れ腐敗している亡骸も多い。かろうじて息のある者もその目はもはや何を見るでもなく虚ろである。少し前は死人の腕や足を啞えた野良犬も見たが今は見ない。大方、犬の方が人に食われてしまったのだろう。都の外れでは人の肉を売り買いしているらしい。そのあまりの鬼

畜ぶりに羅城門にいと言われた鬼でさえ逃げ出し、今は死体を放る場となっている。そんな荒廃し死臭が充満する街を河原に向かっているとぼとぼと歩く。駆けたいが無駄に体力を使いたくない。

五条大橋のたもとに橋を屋根代わりにした貧民窟ができています。

「よお」

「またおまえか」

答えたのは子供である。下履きに破れてぼろぼろの着物の残骸を身に纏っている。ひどい生活をしてきたのだろう手足は棒切れのように細くあばらが浮き腹だけが異様に膨らんでいる。ただ眼だけは老成している。それに比せば松若丸はまだましな身なりだ。

「言ったろ、そんな身なりで歩いていると追いはぎに襲われて殺されるぞ」

「そうだな」

「何かあるか」
松若丸は懐から芋の切れ端をほかのものには見えないように渡す

「すまねえな」

この童とは前からの友達だ。親はない当然住む家もない。寺の軒先や橋の下を寝ぐらとしていた。親のない者同士うまが合う。もっともこの時代親のないものは市中に掃いて捨てるほどいる。

今から八百年前の日本の話だ。「平家にあらずんば人に非ず」と権力を栄耀栄華を欲しいままにしていた平家が滅び変わって源氏が台頭してきた。政権が変わればその下も変わらざるを得ない。庶民は頭が誰になろうと関係ないが下級と言え貴族である以上そのとぼつちりを受ける。松若丸の父もその一人だった。

庶民に一番関係するのは天候だ。飢饉になれば食い物がなくなる。社会に余裕がなくなれば貧しいもの、弱いものからその影響を大きく受ける。長引けば弱いものから死んでいく。子ども、病人、老人。すでに死体をかたずける者もなく亡骸は都大路に打ち捨てられたまま腐敗し、その死臭はすでに都の香りに定着している。親が子を殺し、子が親を殺す、他人の物、命を奪いそれで生きていく。そうやって生きていくしかない。「ねずみ」もその一

人だ。少し前まではねずみのような親のない子供でも拾ったり盗んだりして食い物を手に入れることができた、しかし今は落ちていゝるものも盗むものもない、野良犬猫も食い尽くされていゝない。ねずみのほかに十人程の仲間がいた、弱いものは群れなければ生きていゝない。松若丸は食い物を持って来てくれるし、腕つぶしも強いからちびどもの親分格だ。しかしみんな死んでしまった。一緒に大人から逃げ回った日が懐かしい。

「すまねえな」

「言うな。こんなものしか持ってこれない俺もつらい」

「おれ、嬉しくてな。親もなければ兄弟もねえ、独りぼっちだから。このご時世そんなの当たり前だけど、そんなでもお前が俺のこと気にかけてくれると思うと、嬉しくてな」

「べつに当たり前だろ」

「そんな、物事がうまくいってるときはな、でも、もうどうにもならなくなっちゃったら・・」

「つらいな」

「つらいよ」

「おれは死んだらどうなるんだろうな。時々なんでこうしているか分らなくなる。だってそうだろ、大きい奴とかにわけもなく蹴っ飛ばされて、食い物も無く始終腹減らして、そんでも死にたくないし。もうどうでもよくて死にてえと思うんだけど死にたくないんだよ。怖いんだよ」

「怖いよな」

「お前も怖いかな」

「怖い。養なわれている身だから、伯父の言う通り必死で学んでいるが、おい知ってるか、俺そうとう賢いぞ」

「自分で言うか」

「言うな、伯父も目を丸くしている。でもな父上だって賢い人だったんだ。なのに父上の

上の上のそのまた上の清盛が死んじゃったら途端に職がなくなつてそればかりか罪人扱いだ。挙句居る所が無くなつて隠者になつた。父上が上皇や源氏になにかしたわけじゃないのに、父上は言われた事してただけなのに。それもちゃんとな」

「それもちゃんとな」

「おれたちは、わけの分らんもんに振り回されて小突き回されて、ぼろぼろになつて野垂れ死ぬ。いったい何しに生まれてきたのか。苦しむために生まれてきたのか」

「伯父に連れられて寺に行くことがある。その坊主によると人は死んだら極楽つてところに行くか地獄に墮ちるからしい」

「なんだ、極楽つて」

「すぐく良いところらしい。いつも春みたいに花が咲いていて、良い香りがして偉いとか偉くないとかなくて欲しいものが何でも貰えて」

「ほんとか、それはいいな。食い物も山ほど食いきれねえくらい有るんだろうな。あー一度でいいから腹いっぱい食いてえなあ」

「それがさ、残念なことに食い物は無いらしい」

「なんだよそれ」

「そもそも腹が減らないんだと、だから食わなくてもいいから、食い物も無いんだと」

「食わなくても平気なのか、病気になるんないのか」

「大丈夫みたいだ、どんな病気もないらしい」

「そうか、腹減らないのか。でもそれはあんまり嬉しくないな」

「だな」

「腹減って腹減って、ひもじくて、ひもじくて、そこに山盛りの食い物。食って食って、のど元まで詰め込んで。あーうまかった」

「あー、うまいだろうなあ、それ」

「だろ、おれはそっちのほうがいい」

「俺も。でな、坊主が言うには、嘘ついたり他人の物盗ったり生き物を殺したら地獄というところに行くらしい。そこには獄卒というのがいて殴る蹴るは当たり前。嘘つきの舌抜いたり、火あぶり、水責めとか、とことん虐められるらしい」

「またいじめられるのか」

「らしい」

「じゃあ、いまとかわらんのかな」

「変わらない」

「死んでもかわらないのか」

「変わらない」

「なら安心だ」

「そうだな」

「こんなんでも、今日までやってこれたしな。

あのな、さっき言ったろ、おれはこんなんでも、お前がおれを知っていて、おれに食い物

持って来てくれたり、話してくれていることがすごく嬉しいんだ。誰かがおれを見ていて

くれる、心配していてくれると思うとすごく嬉しいんだ」

「よせ、照れる」

「お前、おれのこと忘れないでくれよ。おれもお前が先に死んでも絶対忘れないから」

「ああ。でもどう考えてもお前の方が先に死ぬな」

「あー、そうだな」

「でも坊主が言うんだよ、俺たちはたまたま生きているって。だからちょっと先のことも

分からないんだと。死ぬときは死ぬらしい」

「そら死ぬな」

「で、金持ちは死んだあと地獄に行きたくないから、仏像の手に紐付けて自分と繋げて寝

るらしい。そうすると死ぬときに仏さまが迎えに来てくれるらしい」

「で、極楽直行か、おれはそんなに極楽行き

たくねえな」

「どうせ、金持っていないし、行きたくても行けないな」

「悔しいな」

「悔しいよ」

「がきじゃやなければ、大人だったらこんなにみじめじゃないよ」

「大人だって似たようなもんだ。俺の父上み

たいに、上の奴らにいいように使われてごみ見たいに捨てられて」

「金か」

「金でもないよ」

「だって、金があれば腹いっぱい食えるし、

人から蹴られたり殴られたりしないだろ」

「うん、だけど地獄に行くんだ最後には」

「そうなのか」

「そうなんだろ、だから仏像に紐付けて寝るんだ」

「金持ってもどうなるか分からなくて怖いんだな」

「同じだ」

「おれたちと同じだ」

バカも休み休み言え！とよく言われたが休む暇があったら正気に戻るので馬鹿は言えない。バカはのべつ幕なくバカなのだ。で、前回に続き先行きも考えずバカはひた走る。絵解きの件である。絵解きの語りの部分を底本、講談本、浄瑠璃、実演DVDいろいろ調べたがどうにも面白くない。だったら自分で作るしかないと極めて自然に短絡的に思考し、後先考えずに実行してしまうところがバカの真骨頂。「令和」は理解不能だが「人生はロッケンロール」が解ってしまうところが我ながら恐ろしい。

が、しかし親鸞聖人はその生涯のほとんどが史実としてわかっている。よって少ない史実に虚構を大量に練りこんで話を創る。だから「親鸞異聞」とした。で恐ろしいことに今はほとんど物語が浮かんでくる、そのうちどっかで行き詰まるに違いないがそんなことはなかった時の話だ。ただ直近の大問題は物語が異様に長くなっている。で絵解きの実演時まで暗記できるかどうかだ。多くの方がお気付きの通り私は記憶力が無い。忘れっぽいのではなく記憶できないのだ。憶えなくてはいけない事を考慮せず物語の進捗に喜んでいて悲しい。今回はその触りの部分を載せました。

迷惑だよなーとか聞こえてきそうですが「人の迷惑考えず、やって来ました電線マン」こういう感じですよ。ごめんなさい

定例 いずれもご自由にご参加ください

。聞法会 毎月 二日 午後7時より(1月、8月はお休み)

。歎異抄を読み聞く会「微妙音」

毎月 五日 午後2時(8月はお休み)

。白色白光の会(婦人会) 毎月 第2木曜 午後1時

。照久会 浄土真宗初めて講座 2月、4月、6月、10月、

十二月の第2土曜 午後2時より(参加費2千円。照久会会

員は千円) 講師聞成寺住職 佐竹貫裕師

。仏像なぞり書き「仏像書くぞう」

毎月 第2水曜午後6時 月の最終日曜午後3時

照久山恒正寺

〒177-0041 練馬区石神井町3-17-4

TEL 03-3996-2064

住職